Steinbeck 研究

森　　政　　勝

(9) ***Sea of Cortez*, 1941**

Sea of Cortez とは the Gulf of California すなわち the Gulf of Lower California の古い名称である。この作は Monterey で太平洋生物学研究所を経営していた Edward F. Ricketts との共同執筆になる leisurely journal of travel and research[92] であり，決して通り一遍の旅行日記ではなく，まして物語でもなければ哲学の一体系でもない。Steinbeck の著作のうちで，これほど非社会的であることを特色としたものはなく，これほど商業的に不首尾に終つたものはなかつたと言われる。

この本が厳密に言つて Steinbeck の再生の記録であることは，1941 年 6 月 9 日 Pascal Covici にあてた彼の手紙の中の次のような言葉 When this book is done, I will have finished a cycle of work that has been biting me for many years and it is simply the careful statement of the thesis of work to be done in the future.[93] と，仲介人にあてて，この本は a good clearing-out of a lot of ideas that have been working on me for a long time[94] であると書き送つた言葉から十分に立証される。彼はこの作で，それまでの自分の中に残されていた社会的強制の観念をすべて消し去り，完全な科学的真空の中に入りながら，自らの基本的な態度と信念とを表明している。これは非常に貴重な記録であつて，そこに哲学としての価値があろうと，科学としての価値があろうとそのいずれであつても，Steinbeck とその作品を理解するには重要な資料となる。この作が彼の作品中に占める関係は *Death in the Afternoon* や *Green Hills of Africa* が Hemingway の作品群中に占める位置と大体同じであり，これらの作品はいずれも人生と芸術に関する随想であつて，小説を書く間の息抜きとして書かれたものである。

この作には，それまでの作品中には現われなかつた数個の working concepts が含まれている。それは P. Lisca によれば，非目的論的思考，生態学，集団的動物の可能的個々性，適者生存，集団的精神記録，すべての生命の神秘的同一性などである。[95]

Steinbeck はこの旅行で，かつて自分がいだいていた社会的観念を軽ベツ(蔑)的に振りかえり，ものが集合状態になるとその結果「敏シ ョウ(捷)なもの，賢明なもの，ソウ(聡)明なもの」[96] を排除するようになり，何か新しい事をやるというのではなく，迅速な自己再生をやるものであると考えており，したがつて「各文化間の橋渡しをするものは，教育，公共の健康，良い住居であり，また民主々義，ナチズム，共産主義などという政治的媒介物であろう……」[97] とも言つている。彼は高度に協力的な社会を考えながらも社会進歩の概念に対しては最終的な悲歌を書いている。Perhaps the pattern of struggle is so deeply imprinted in the genes of all life conceived in this benevolently hostile planet that the removal of obstacles automatically atrophies a survival drive. With warm water and abundant food, the animals may retire into a sterile sluggish happiness. This has certainly seemed true in man…If these things are true in a biological sense, what is to become of the warm fed protected citizenry

of the ideal future state[98]? Steinbeck は現代生活の錯雑さやタイ(堆)積された人為性を信じない。「古生物学の規則である」として彼は次のように述べている。「装飾と複雑化が絶滅に先行するということ。われわれの変質——集合の行列，共同農園，機械化された軍隊，食糧の大量生産などはその証拠であり徴候でさえある——は，巨大なハ(爬)虫類の，次第に厚くなつて行く装具（これは死滅に至つて始めてやむ）にまさしく相当するものであろう[99]」。

この作は説明的であるためそこに盛られている観念は他の作品におけるよりも非常にはつきり露呈されている。この作は Steinbeck が人間や環境に対して特殊な神経質的反応を示しそこから得られる生命観を合理化しようとする試みであり，生物学的思考——The true biologist deals with life, with teeming boisterous life, and learns something from it, learns that the first rule of life is living…(これは彼が *Sea of Cortez* で述べた言葉である)——を強調し，多くの生物学的観念を巧みに整理しているので，彼の小説中に散見する生物学的観念は自ら明らかになる。この生物学的観念には科学と神秘性の結合が見られるのが特徴で，これがこの作のテーマなのである。彼の作品に現われる性的放縦にしても，それは自然的神秘主義と幻想的人道主義によつて支えられているため，彼の immoralities は単なる偶発的なものに過ぎないし，烈しい反作用の結果生み出されたものでもあり，そこには包括的な哲学的根拠もあるのである，と解すれば，この作に現われている彼の自然主義的思イ(惟)は明白なものになるのであろう。

Toni Ricketts[100] はこの作が *Of Mice and Men* の基底をなす哲学的見解——この作の哲学は D. Weeks の言葉を借りれば thing is because it is[101] である——を明確に述べていることを指摘している。この作は初め *Something That Happened* と題され，人間の行状に対する non-teleological な態度を明示するつもりであつたと Steinbeck は友人に語つたと言われるが，この作の思イ(惟)は生活に対する責任ある意識を求めようとすることに飽き，非目的論的な報告の実験をしていることを暗示している。非目的論的観念は Darwin の唱える自然陶汰と結び付いた "is"（現在ある）という思考を通じて得られるもので，哲学的相対主義や独断的仮説に対する科学者のシュン(峻)拒と一種の道徳的宿命論の混合物であるように思われる。

Steinbeck が愛好するペン画風に超簡素化された文体をもつて書かれたこの作の form は熱狂的な生物収集，標本の保存，彼が乗つた小舟が新しい地点に着く時ののんびりしたムダ話といった航海のリズムを持つている。この本は生命についての思索がいたるところに見られる——権威をもつて語る責任ある科学者の公式的な仮説ではなく，気まぐれな洞察であり，推測であり，また海洋生物学上の事実が敏感な精神に暗示するヒントであるが，しかもこれは気のきいた対話によつて香気を放つている，と F. Bracher は説く。

この作はそれ以前の多くの作品とは矛盾し，次に出された *The Moon Is Down*, 1942とは意表外な対照をなしている。1947年に出された *The Wayward Bus* の意図を明らかにしようと思えば是非とも *Sea of Cortez* における作者の態度を知らねばならない。「genteel な読者にとつては，この作は非常にいやらしいものであろう。というのは，海水のたまりにいる生物の急務は生き残るための生殖であるからである。生物はいたるところで繁殖する」という意味のことを Steinbeck はこの作の中で記している。彼の場合，いたるところで繁殖するのは生物だけではなく，作中人物もまたそうなのである。彼の後年の作にしばしば見られるのは，物理的な言辞で書かれた性関係の場面である。たとえば，Tortilla Flat のどろん

こ道で，国道66号線を行くトラックの上で，Dora Flood のシ＝ウ(娼)家で San Juan de la Cruz への回り道にあたる物置小屋での。このような性関係それ自体は純粋に善なるものであり，生物学的衝動がお上品なものであると考えられる時，あるいは人間の作つた習俗にしたがう時そんな時にだけ悪になると彼は言う。しかし *The Wayward Bus* に出てくるおかみさんの Pritchard は欠陥のある有機物であり，主人の Pritchard は機械化され非人間化され，いわば一種のオートメイシ＝ンになつているから，この夫婦の性生活は不健全である，と彼は言う。*Sea of Cortez* は事実として観察されるものだけを取扱い，形而上学的考慮は可及的に避けようとする科学的思考方法に終始しているが，[102] 客観世界への愛情も度を越すと彼の合理的科学的な立場は危殆に瀕するおそれがある。*To a God Unknown* から *The Wayward Bus* に至る一連の彼の小説を通じて流れる神秘主義のために彼の小説は伝統的な自然主義小説とは異つたものになつている。プランクトンの集積的な pulse とか，burned な地域には海の生物もおらず人間を寄せつけない場所もあるとかいうような，言わば生物学的な神秘主義に Steinbeck がいかに心を引かれていたかは，この作のいずれのページからも明らかにうかがわれる。

ともあれ，Steinbeck を知りその作品を批評するためには，この非小説的記録である一本がはなはだ重要なものであることを重ねてしるす。

(10) *The Moon Is Down*, 1942

この表題は *Macbeth* の第二幕第一場二行目 The moon is down; I have not heard the clock.（月は落ちましたが，時計の音は聞えませんでした——坪内訳）から取られたものである。この表題も，二つの強勢のある語を使うという Steinbeck の多くの表題の慣例にしたがつている。意味の点では，平板で明快な表題，たとえば *The Grapes of Wrath* とか，場所の名を取つた *Sea of Cortez* などに比べ見劣りはするが，ethereal であると評する James Thurber のような人もいる。

Sea of Cortez の出版後わずか三カ月で出されたこの作は，OSS（戦略事務局）のWilliam J. Donovan 大佐と，ナチが占領した地区における抵抗運動援助の手段について数回討論した結果から生れたもので，この作に材料を供給する直接的な経験は Steinbeck には何もなかつたのである。ドイツにおける地下運動の勝利的揚言で巻末を飾つているこの作は，外国軍隊による占領下の民主々義団体の力についての珍しい記述であり，いわば a kind of celebration of the durability of democracy[103] であり，Steinbeck はこれがドイツ人を人間として取扱った態度が欠点であると指摘されたと言つている。[104] ナチズムと民主々義とを対比させ，ナチ党への憎しみをいだかせる意図があつたことは確かである。この作の目立つ点は，全体の反ファッシ＝的闘争が一つの比ユ(喩)とみてさえ，いかに奇怪なほど単純にみえるかということであり，作者の素朴さをむさ苦しい演劇的情緒の中に書き換えることがいかに容易であるかということである。

この作は *Of Mice and Men* ほどの出来ばえはないが，それと同じように舞台用と銘打つて書かれた脚本的中篇小説というよりはむしろ純粋に脚本に近いものである。この作の意味を解く大きな手がかりはその form である。内面的な証査からすれば，最初は脚本として書かれたらしいが，やがて八つの場面のおのおのを一章ずつにして小説として書き変えられたようである。directions は明らかに舞台用のもの，装置は舞台装置であり，対話は舞台用の対話として書かれたことは明リ＝ウ(瞭)である。この事実を立証する最も容易な方法は，

各章の末尾——ここで幕をおろせばそのまま劇としての構成になる——を取上げてみることであり，過去時制をすべて演劇的現在に変えてみることである。

Steinbeck の著作の基本的な問題は，社会との関係における個人という問題である。この問題を中心として彼のすべての作品は二つのはつきりした傾向に動いている。その一つは，極端な非社会性ないしは個人性から社会性へという傾向（これは脚本小説 *Of Mice and Men* をその枢ジュク(軸)として動く)。その二つは，科学者は社会性には超然としているものであるという個人主義への傾向。*The Moon Is Down* では階級闘争から国際的闘争へ，Wales（彼の第一小説 *Cup of Gold* の舞台）や California からドイツへと場面が転換しており，作者が大戦に参加したためこの第二の個人主義への傾向は次第に力の弱いものになつたが，それに対する未練を残しながら，集団的人間——これは敵に侵入された地区では turned as a unit and dived as a unit な魚のようなものである[105]——や，社会性に期待をかけている。この作は Steinbeck の哲学や技巧の発展を仮想するに好都合であるとし彼の将来を嘱目したのは S. E. Hyman であり，Floyd Stovall[106] はこの作が Steinbeck の輝かしい偉業であり，a further proof of his ability to adapt his genius to the mood of the moment without sacrificing the permanent values of his art であると見なし，この作が社会的ないしは経済的な問題よりむしろ精神的特性に重点をおいているため，人間本性の尊厳と価値への Steinbeck の信念の主張であるとなしている[107]。この作が Steinbeck の新機ジュク(軸)——ほとんど手を加えずに舞台や映画のための脚本に換えられる小説——を示すものである，とするのは E. Wilson である。この作は Broadway で上演され，また映画にもなつたが，賛否両論がにぎやかであつた。しかしナチに占領されたヨーロッパでは多くの外国語に翻訳されノールウェー王はその価値を高く評価して勲章を授けた。ともあれ Hyman や Stovall のような見方や賞賛のしかたをする批評家はごく少数で，一般的にはこの作は失敗であつたと見なされている。

P. Lisca によれば，Steinbeck が最初の小説からずつと関心をいだいていた作者の態度や観念がこの作で効果的なものにならなかつた理由は (1) 愛憎並存的傾向に平衡を保たせる努力から生ずる緊張がなかつたこと——この緊張が *In Dubious Battle* や *Of Mice and Men* や *The Grapes of Wrath* をまとまりのよいものにしていたのである。(2) 抽象化が *Sea of Cortez* と同じほどむき出しであつたこと——以前の作においては，集団的人間的概念，生態学的方向付け，非目的論的思考などは，事実に即した観察や素材の特殊化に対するハ(把)握などで明確にされていた。[108] B. Nevius によれば，この作の失敗は intention についてではなく，emphasis の置き方であり，[109] G. Snell によれば，この作は Steinbeck のもつあらゆる欠点——感傷性，誇張，整いすぎる筋の運び——をもつている。[110] 再び P. Lisca によれば，この作の小説としての主な失敗は，情緒的にはわれわれに関係のある限界を越えて一つの様式を押し進め，題材の非人格化にまで行つたことであり，[111] 科学的客観性を余りにも極端に用い過ぎた（このことは *The Wayward Bus* についても言える）ためである。[112] この作が余りにも単純すぎるほど抽象的で真実味のない半戯画的なことが失敗であるとすれば，それはむしろ当然であろう。というのは，Steinbeck の人物は完全な小説的現実性に到達することはまれであり，個性化されておらず，ほとんど人間的ではないからである。

月の象徴は，Steinbeck にとつては格別な意義を持ち，繰り返されるテーマのようにあちこちに見られる。彼が自分の作に対して「月が沈んだ」と言うのは，Duncan がまさに殺さ

れそうになつているとか，暗くて遅い時刻だとかいうことではなく，むしろ彼自身の月が，すなわち Henry Morgan (*Cup of Gold* 中の人物) の個人主義の月が，神秘的で到底入手が不可能な婦人という月が，大義とか使命という月が沈むと言いたいのであろう。彼はこの作で自分の月を引きおろし，より偉大で一層方向のはつきりした作を書くようになりたいと願つたであろうが，幸か不幸か彼の月は中天高くかかつたままであつた。

(11) ***Bombs Away,*** 1942

…mostly this book intends to tell the whole people of the kind and quality of our Air Force, of the caliber of its men and of the excellence of its equipment.[113] という Steinbeck の言葉からも推測できるように，これは明らかに宣伝が目的であつたが，広く読まれ Hollywood には25万ドルで売られたという。これは陸軍航空隊の "Hap" Arnold 大将から聞いた話からヒントを得て書かれたものである。文学作品としては問題外である。

(12) ***Cannery Row,*** 1945

ある兵士が Steinbeck に「戦争に関係のない楽しいものを書いてほしい。ぼくらが読むものを書いてほしい。——戦争にはうんざりしているのです[114]」と言つた。Steinbeck 自身も戦争の憂ウツから気を晴らそうとしてこの作を書いた。50万部位が軍隊に配布されたと伝えられている。

この作は調子こそ違え，すべての点で *Tortilla Flat* の単なる反覆にすぎない。構成は挿話的で互に連関する多くの物語から成つている。Steinbeck はこれを挿話の集合体以上のものにしようと考え…to open the page and to let the stories crawl in by themselves[115] という書き方をしている。一言にして言えば，この作は自らを社会的廃物であると決めこんでいる一群の人びとの物語であり，*Tortilla Flat* や *The Wayward Bus* と共に，動物的なコウカツ(狡猾)さの水準にまで引き下げられた人生の一つのタイプと，魅惑と滑ケイ(稽)を誘うような一つの単純な行状を見せてくれる。Steinbeck の作品中の主人公は多かれ少なかれ生物学者的な精神の持ち主であるが，その最も代表的であると思われるのがこの作に出てくる Doc で，この人物は *Black Marigolds* から引用されたものである。「この作中の人物はもちろん仮作されたものであり，組立てられたものである[116]」という Steinbeck の否定があるにもかかわらず，この Doc の性格は Edward F. Ricketts の性格に外ならない。海洋生物の採集旅行 (*Sea of Cortez*) で得られた生物学的生命観——生命は闘争，色彩，強烈，暴力，食物摂取，性的興奮から成つているとなすもの——と，動物こそ人間以上のことを知つているのだという信念と，徳義的倫理的選択故に人間は自らを苦しめるものであるとする確信，こうしたものを持つている彼が Ricketts 生き写しの Doc を登場させたとて何も不思議ではなく，このような彼の考えが反映しているからこそ，この作は単に痛快味と色彩美を持つた面白い愉快な小説—— E. Wilson によれば most enjoyed reading[117] となる——であるとだけ言い切るわけにはいかない。この作は another peep hole[118] からながめられた世界を展開しており，そこではショウ(娼)婦は天使に，女郎屋の主人は聖人になりうるのである。Steinbeck は初期の作品では paisanos を真剣になつてかばおうとはしていないが，この作では paisanos に似かよつた集団の人びとを公然と許容している。

この作が *Tortilla Flat* の反覆であることは前述したが，この事実は *Tortilla Flat* 時代の気持への懐郷的復帰であり，戦争という緊張を経て再びわれわれが心理的に復旧したことを示すものでもある。Steinbeck がこの作で *Tortilla Flat* の方式を繰返し，しかも

serious な小説を書き続けることにしたことにわれわれは非常な失望を感ずる，と W. M. Frohock は言うが，この失望も実は，この作が彼の偉大な力と弱点との根元を非常にはつきり現わしていることに対してであり，また *The Grapes of Wrath* と *In Dubious Battle* の作中人物が本質的には *Tortilla Flat* と *Cannery Row* の作中人物と同質であるということに対してである。この作と *The Pearl* と *The Wayward Bus* は近代文明の基礎的仮説の吟味を目的とする三幅対ではあろうが，この作と *The Wayward Bus* には彼の初期作品の有するむさ苦しさとむら気が混在することは見のがせない。しかし D. Heiney は *Sweet Thursday*, 1954と共に彼の大作とまでは行かなくとも，この種の文学の魅惑的に成功をおさめた実例である，[119] としてこの作を高く評価している。

Malcolm Cowley によれば，この作は poisoned cream puff であるが，この言葉を Steinbeck は認めたという。その毒というのは中産階級的価値への暗黙の攻撃であるらしい，と F. Bracher は解する。しかしこの作には横イツ(溢)した温かい人間性とユーモアとが見られる。このユーモアは Dickens 風のものではあるが，20世紀的な淡白さという Steinbeck の特異性と真価とが目立つている。形式ばつた社会は機械的な愚鈍さを持ち，精神をジュウリン(蹂躙)したり，人生を不合理に空費させるものであるが，このような空費は，刑務所にも入らず，目的も一生ガイ(涯)持たないことを光栄に思うような misfits や，やり繰り上ズ(手)な浮浪者たちによつて無視されている。「彼はいつもの手際のよい表現をもつて」このような有様や「心の弱さや性格の堕落などの感傷的光景を書いた」[120] (Orville Prescott) のである。Steinbeck が得意とする black and white oversimplification については *Sea of Cortez* の項でも触れたが，この作からの一例を上げてみよう。これは Doc の言葉である。The things we admire in men, kindness and generosity, openness, honesty, understanding and feeling are the concomitants of failure in our system. And those traits we detest, sharpness, greed, acquisitiveness, meanness, egotism and self-interest are the traits of success.

(13) *The Wayward Bus*, 1947

この作の出版後 Steinbeck は一人の会見者に，この本が Chaucer, *Heptameron*,[121] *Decameron* などから相当多くの影響を受けたことを語つている。また *Divine Comedy* の反響もあると言つたと伝えられる。P. Lisca は *The Wayward Bus* が *Divine Comedy* に類似しているのは偶然ではないとして，この作を次のように評釈している。「この小説のエネルギーは作中人物についての筋と旅行についての筋との間の不断の緊張から得られる。この小説中の行動を図示すれば，円運動をやるのは作中人物であり，垂直運動は旅行がやるという上昇的ラ(螺)線的なものである」[122]。

多くの人びとは，この作が冷たく，かさかさしており，皮肉で，解答や解釈がない，と言つて不愉快がつたり非難したりするが，それは当を得たものではない。Steinbeck の以前の作におけるほど，読者はあわれみも同情も感じないし，また作中人物になりきることもない。たとえば，きざで不正直な Pritchard に，惑わされる Norman に，皮肉屋の Van Brunt に，自己本位な Alice に，下品な Louise に，現実的で客観的でこの人がいない世の中はくずれてしまうであろうし，いつも世界を泥の中から掘り出すために戻つてくる運転士の Juan Chicoy などに。作中人物には sympathetic な人は少いが，彼らはどちらかといえば激しい絶望的な正直さを，自分に対しても，また他人に対しても持つているのが目立つ。F. Champney の言うところによれば，彼らは the simpler forms of protoplasmic irritability[123] によ

つて活気付けられている。Steinbeck はこの バスの乗客を，旅行中一人として実際的には性格を変えさせてはいない。しかし Juan が六シリンダーの世界をしばらく離れている間に，絶頂に達する一連の反応の中である人物を地獄におとし，精神の真実性に直面させ罪の浄化を願わせている。作者はこの乗客には温情も持たず愛情も感じてはいない。ただ objectivity of a man viewing little animals through a microscope[124] をもつて描いており，当然のことながら，この作には以前の作ほどの情緒の水々しさはない。この作中の主な人物は type specimens で，単なる製作物ではなく文明の構成物なのである。作者の気持を言葉に現わせば Here is a typical group of homo Americans. See, this is how they look, this is how they act.[125] となるであろう。彼は人間の見本の心に興味を感じているのであり，「一群の昆虫の道化を叙している昆虫学者のようでもある」[126]。賞賛も非難もないのに不思議はない。

この作は彼の他の作に比べて，象徴的，類推的な面が顕著であるため，明確な結論を求めても，それはムダである。表題の示す通り，このバスは wayward であり，乗客は the way they are である。この作者を誤解しないためには why's を口にしないことである。そうすれば失望も感ぜずにすむ。彼の説く "is"-thinking にしたがつたものであり，what actually is の説明であると見れば，この作の象徴の解釈は自由なものになるであろう。all the god the fathers you ever saw driving a six cylinder, broken down battered world through time and space[127] これは作者が気まぐれの運転士 Juan Chicoy を評した言葉であるが，こうした解釈も有りうるわけである。このように考えられるのは，この小説の構造や手法の問題にも関係するであろうが，この小説の内包する複雑な意味の一端を示すことにもなる。

この作は他の作とは異り，事件の有形的な動きの物語，つまり写実的物語というよりは，人物の動きに重点がおかれ何らかの深い意図を持つていたことは，その epitaph からもわかるであろう。

> I pray you all gyve audyence,
> And here this mater with reverence,
> By fygure a morall playe;
> The somonynge of Everyman called it is,
> That of our lyves and endynge shews
> How transytory we be all daye.——Everyman[128]

この意図は *Canterbury Tales* 的にしようということではなかつたであろうか？というのはこの作は道徳劇の要素を多分にもつ *Canterbury Tales* に非常な形式的類似をもつており，バス旅行中の多くのアメリカ人の巡礼者を紹介しているからである。この旅行中の災難，驚き，争いなどによつて巡礼者の正体はあばかれる。メキシコ系アメリカ人の運転士 Juan のもつている生来の力を背景にして，われわれの文化から吸収されたもろもろの価値が試験されるのである。この作の effect から見ると Swiftの *A Voyage to Brobdingnag* 中の詳細な描写のもつ effect と似ている。この両作の意図するところは，人間を卑しさの中にさらすことである。ところが Swift の作の読者は，泥の中に鼻をつけたような気持になるが，Steinbeck の場合は，かみの毛を後方から引張られて頭を上げてみると，ザンゲ（懺悔）と大書された断ガイ（崖）が前方に見えるのである（P. Lisca はこのような主旨のことを述べている）。

この小説は，構造はもちろんのことその散文体からみても well-made な小説の一つであ

る。というのは，作者はこの作で再び独特な散文（それは媒介物としても，または手法としても役立つ）を作り上げたからである。Bernard De Voto によれば「物語としてはこれは無類であり——Steinbeck は最も老練な名工である——喜劇としては素晴らしい。小説としても正に満足のいくものではあるがそれ以上のものではない」[129]とある。この最後の言葉は，この作で取扱われている性への Steinbeck の先入観に対する反発であろう。最も知覚の鋭い評論家 Carlos Baker は，この作の richness of texture と solidity of structure は *In Dubious Battle* 以上であるとしている。ある批評家はこの作を「科学的自然主義」的であるとしているが，Baker は Steinbeck が savage indignation をいだかなかつたのはユーモアがあつたためであるとしている。この作が *The Grapes of Wrath* 以後のどの作より「明らかに卓越している。というのは Steinbeck の人物選定や健康的で明確な価値の重視は，アメリカ人の生活に対する真剣にして有意義なテーマに彼の関心が復帰したことを示すからである」[130]と，ある雑誌の評論記者は言う。この言葉は Steinbeck に対する評価の一般的混乱を終結させるものにはならないであろうか？ 多くの批評家が Steinbeck の作品を一つずつ評価することを要求される場合，相当な混乱が起こるのは，Steinbeck の最上の分野が subrational ではつきりした言葉を持たないような世界であることから来ている。前記の記者の言葉より更に的確なのは F. Champney の評言であろう。すなわち「この作における Steinbeck の態度を知るかぎは *Sea of Cortez* 中に明らかに述べられている」[131]。この作は *Cannery Row* や *The Pearl* に見られる一般的な排除的態度と *Burning Bright* や *East of Eden* に見られる一般的な肯定的態度との間の思想の流れの停止点にあるとみられる。この点からすれば，在来の罪悪観の無視，あるがままの生活と自然の受け入れ，生活と人間を愛すること，神秘と創造物の単一性を信ずることなどが望まれてくるのである。

由来 Steinbeck の作はアメリカの dilemma を非常によく表現しているので大変に興味が深いが，この作では彼のそうした思想の強さがはつきりとは現わされず，粗朴に失したことが不評の一因となつているのであろう。久しく Steinbeck を支持してきた J. H. Jackson は「Steinbeck は今や人間をほとんど動物であると目しているように思われる」[132]と言つて，別の観点から不満を述べている。しかしこの Jackson の評言の当否は大いに問題となるであろう。

(14) *The Pearl*, 1947

低地 California に住む一人の土民がちよつと信じられないほど大きい真ジュ（珠）を発見したが，ドン（貪）欲な人に追跡されてついにそれを大洋に投げ返すという話が *Sea of Cortez* に出ているが，これを原料にした物語が1945年12月 *The Pearl of the World* と題して *The Woman's Home Companion* にのつたが，これはその年 Mexico で映画になつた。この台本が基になつて後に *The Pearl* として出版されたものである。I tried to write it as folklore, to give it that set-aside, raised-up feeling that all folk stories have. I called it "*The Pearl*."[133] Steinbeck はこのように言い，更にこの作は a black-and-white story like a parable[134] であるとも言つている。概して Steinbeck には，parable にしたり pattern を作つたりする傾向がある。

この作の素朴な Kino という主人公の名前はイエズス会士 Eusebius Kino にちなんで付けられたものであると言われる。この人はメキシコ湾地方の伝道士で探検家として有名であり，低地 California が島ではなく半島であつたことを立証した最初の人である。Kino の妻 Juana

は婦人の意。医師と真ジュ(珠)買取人は明らかにドン(貪)欲の象徴である。A. Comfort によれば「象徴主義をソウ(聡)明に考えようとすれば，心理学が行われなかつた以前の写実主義を再考しなければならない。というのは，どんな想像的物語も事件の直接的叙述であり，心像を構図にする意識力の反映であるからである」[135]。*The Pearl* に関する Steinbeck の記述のしかたはこのような方向をとつている。なお Comfort は「この話がもし parable であるなら，多分すべての人は，それから自分勝手な意義を取り出し，自分勝手な生活をその中に読みこむであろう」とも言つている。この本のテーマは実際的なものと特殊的なものとの見事な織りなしでありその中に重要な象徴的暗示が入つている。象徴的な行動にはしばしば精神状態が示顕されるがその行動の効果は，読者がどのような情緒に入りこむかによつて決まるものである。

この parable が概括的に見て，たとえどれほど意味深長であろうと，Steinbeck がこの parable をまことしやかで強力な人間的冒険の域にまで巧みに肉付けできたのは，また，現実的なものと抒情的なものとをグウ(寓)話的な構造に融合できたのは，彼の天才の然らしめるところとは言え，結局はその散文体によるのである。この文体は彼の他の多くの小説におけるように，一つの媒介物となるのはもちろん手法にまでなるほど伸縮自在なものである。彼の最上の散文は常にテーマと象徴的効果を立証している。一例を引用しよう。The land was waterless, furred with the cacti which could store water and with the great-roofed brush which could reach deep into the earth for a little moisture and get along on very little. And underfoot was not soil but broken rock, split into cubes, great slabs, but none of it water-rounded. Little tufts of sad dry grass grew between the stones, grass that had sprouted with a single rain and headed, dropped its seed, and died.[136] この作はもちろんのこと *Of Mice and Men* や*The Grapes of Wrath* のような作品を bathos (漸墜法) に陥らないようにしているのは Steinbeck の無口ということである。彼は Hemingway と同様作中人物の情緒と精神の状態とを客観的観察者が見たり聞いたりするものを通じてのみ，つまり，作者が作中人物の外に立ちながら示現しているのである。しかし Steinbeck は抑圧された情緒の結果を示すようなことはしない。これがおそらく，自然や動物生活に対する彼の描写を，非常に多くの批評家が不当に，あるいは誤つて強調している理由であろう。この作に見出される Steinbeck の技巧の一つは，ある行動の暗黙の解説として，略奪的な自然を例証することによりその行動の腰を折るという手法である。

厳密に言えば，この作では，科学による精神の結合——これがこの作の自然主義的テーマである——は彼が希望するほど巧みには行われてはいないが，この作の偉大な業績は，彼がこの単純な物語で，人間の不断の精神的闘争——本質的には自身を物質世界に適応させようとする闘争——の parable を作りながらも，意義の物質的水準に基本的な言及をなすことができたということである。

この作は Steinbeck の多くの手法と，作家としての先入観がコン(渾)然として一体となつていると考えられる。先入観とは人間の集団を群れをなす動物であると考えることで，これは「活動的な人たち」や「群れと見なされる人たち」の描写の中に出てくる。しかし彼が人間と動物的活動とを全く同一視したのでないことは注意しなくてはならない。というのは，彼の作品は人間の生物学的遺産に対する継続的な興味を示してはいるが，この作は人間が持つている神話を生み出す遺産に対しても同様に継続的興味のあることを示しているからであ

る。彼の先入観としては，更に，非目的論的思考があり，また，絶体的な非難を加えて「悪党」を創り出すことはやりたくないという気持などがあるが，このような先入観は *In Dubious Battle*, *The Grapes of Wrath*, *The Moon Is Down*, *Sea of Cortez* におけると同様この作作にも明らかにうかがえる。

(15) ***A Russian Journal***, 1948

Steinbeck は報道写真作家 Robert Capa と一緒に1947年7月末から二カ月間 New York の *Herald Tribune* の特派員としてロシアに行つたが，その報告が1948年1月14日から1月31日まで同紙に連載された。それが本になつたのがこの「ロシア紀行」で Steinbeck はこの中で，ロシアの regimentation と，官僚政治と，個人的自由の欠除に失望したこと，芸術家が国家にレイ(隷)属しても芸術は生れ出ないこと，芸術家の本領は社会の architect となることではなく，社会の watchdog となることであるということなどを述べており，多くの批評家によつて好評を博し広くアメリカに大きな反響を起こした。

(16) ***Burning Bright***, 1950

この作は play novellete form をもつたもので，こういう形体をとつたものでは第三番目の作である。第一は *Of Mice and Men* であり，第二は *The Moon Is Down* である。これは Steinbeck の説明によれば a play that is easy to read or a short novel that can be played simply by lifting out the dialogue[137] である。これは *In the Forests of the Night* とか *Tiger, Tiger* とか呼ばれたが，この三つの表題はいずれも W. Blake の詩

Tiger! Tiger! burning bright
In the forests of the night,
What immortal hand or eye
Could frame thy fearful symmetry?

から借用したものである。

あらすじ——三つの異つた背景（サーカス，農場，海）の中で，愛情とシット(嫉妬)と友情と，子供が欲しいという熱望とにいろどられた劇が展開する。登場人物は四名だけ。すなわち肉体的不妊症の男と，精神的不妊症の男と，忠実な友人と，夫に対する愛ゆえに不実を行う若い妻。[138]

この作に対する批判は厳しく，失敗作であることを指摘したり非難したりする者の方が多い。まず P. Lisca はこの作の本質的失敗として，この作が小説でもなく戯曲でもない点を上げている。つまり戯曲としての要素がこの本を小説としてはぎこちないものにし，一方小説的要素はこの本を戯曲としては不可能ならしめている，というのである。同じ play novellete でも *Of Mice and Men* や *The Moon Is Down* では，ほとんど手を加えずにその本を用いてすぐ上演出来たのである。彼は更に用語の失敗を上げている。Steinbeck の散文にはくだらないものも少くないが，この作ではそれが余りにも多すぎ，その上作中人物は a kind of universal language (Steinbeck の言葉) をしやべるわけではなく，その使用語は好い加減な実際語の寄せ集めであり，新しく造られた古語であり，詩的修辞である，と説いている。J. S. Kennedy はその評論 *John Steinbeck : Life Affirmed and Dissolved* の中でなかなか辛ラツ(辣)にこの作をついている。その言葉を借りれば，Steinbeck がこの作ほど哲学者とし芸術家としての弱点をはつきり現わした作は他にないのであり，この作の持つ残忍性と氷のように冷たい無道徳性は最もおそるべきものである。この作は人物の取扱いに失

敗した最も悪い例である。それまでに Steinbeck が発表した十数篇の小説中記憶に残る人物は Ma Joad (*The Grapes of Wrath*) を除外すれば一人もない。いずれの人物もモウロウとしていて faceless みたいである。彼らは鮮明には描かれておらず，また必ずしも彼ら自身というものを持つてはいない。哲学的な意味では何らの型も持たない。つまり魂がないのである。皮相的個性はあるがそれは人格に役立つものではない。彼らは重々しく実証づけられた型の人間であつて生きた人間ではない。これは Steinbeck の想像や手法に欠けたところがあるためではなく，男でも女でも彼の言う a little piece of a great big soul に過ぎないからである。Steinbeck が創造的芸術家でないといわれるのが正しければ，それは神が人間の一人一人をつくる要旨を知らないということである。神が人間をつくる場合には何らの抽象化もやらないが，彼はそれをやる，と。また Kennedy は，この作には作中人物に大言壮語させる悪い傾向があるときめつけ，次のような意味のことを語気も鋭く言つている。この作には非常に大げさで吹きとばすような抜け穴だらけの話し振りが充満している。無定形な概念への彼の好みが見えるし，思考の不明確さはそれにふさわしい表現の不明確さを伴つている。中味のない抽象が話し言葉の蒸気となつて発散している，と。これには Stinbeck も苦笑を禁じ得ないであろう。更にペンを進めて Kennedy は鋭ホウ(鋒)を Steinbeck その人に向けている。Steinbeck は人間自身と人生に対して大いに関心を持ちながらも的確な知識を欠くためにその取扱いはいずれもめちやくちやである。これは彼の作品の皮肉である。彼は人間から最高の知識と強制されない自由意志を否定することによつて人間の尊厳に打撃を与えている。人生を賞賛し尊敬しようと思いながらも，彼は人生を生物学的存在としてのみ考える。彼が人間の言葉として設定するものの中にはひどく粗雑なものがある，と。このように徹底的に Steinbeck を攻撃しながらも，Kennedy は Steinbeck の多くの作品の特徴である下品，ワイセツ，冒トク(涜)的対話がこの作にはほとんどない，と言つてホッとしているようである。この作の失敗点を指摘した P. Lisca も，この作が集団的動物におけるすべての生命の単一性が明確な言葉で示されている点は面白いと語つている。[139] この作のテーマは O'Neill の *Strange Interlude*, 特に F. García Lorca の *Yerma*, 1934 の現代的類似物であり，*Yerma* に出てくる夫の友人である有力な男の名は Victor であるが，これは *Burning Bright* の場合と同じである。Steinbeck のテーマは「永続的な生物学的不朽性の仮定的重要性をくつがえし，人間が存在する限り，どこにおいても万人が不朽であるという紛れもない真理を示している」から，と言つてそれを賞揚しているのは N. Cousins である。[140]

Steinbeck の新しい調子，ないしは方向はすでに *The Wayward Bus* の中に暗示されており，この作でそれが現われ，1952年の *East of Eden* でははつきり主張されている。しかしこの作においても *East of Eden* においても，それはみじめな結果を招くことになつた。

この作は Broadway で上演されたが二週間も続かないという悲惨なことになつてしまつた。批評家たちはその脚本，特にその形体と用語に悪口を重ねることを競い合つたほどであつた。これについて Steinbeck は，それが失敗作であり余りにも抽象的であり余りにも説教的であり，観衆の方が一歩進んでいることを認めた。しかし彼の言い分も聞かねばならない。「play-novellete を用いたものには Aeschylus から O'Neill に至る卓越した権威者がいるが，現代の写実的演劇に慣れた観衆がこのような表現のし方を容認するかどうかは依然として問題である……この試みは物語を道徳劇の比ユ(喩)談的表現にまで高めることであつた…小説や脚本の批評家の多くはこのやり方に非常に腹を立てたためこのやり方の背後にある主題を

見落してしまつている[141]」。(未完)

注

92 Stanley Edgar Hyman : *Some Notes on John Steinbeck* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 162)

93 Peter Lisca : *John Steinbeck : A Literary Biography* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 14)

94 Peter Lisca : *The Wide World of John Steinbeck*, p. 183

95 ibid., p. 181

96 92と ibid., p. 162

97 96と同じ

98 96と同じ

99 John Steinbeck : *Sea of Cortez*, p. 88

100 Edward F. Ricketts の妻でしばらく Steinbeck の秘書をやつていたことがあり, Antonia Seixas の名で1947年 *John Steinbeck and the Non-teleological Bus* を発表している。

101 E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. XXII

102 99と ibid., p. 136

103 John Steinbeck : *My Short Novels* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 39)

104 103と同じ

105 Woodburn O. Ross : *John Steinbeck : Earth and Stars*, p. 177

106 *American Idealism*, 1943の著者

107 101と ibid., p. XXI

108 94とibid., p. 190

109 Blake Nevius : *Steinbeck : One Aspect* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*. p. 204)

110 101と ibid., p. XX

111 94と ibid., p. 196

112 94と ibid., p. 279

113 93と ibid., p. 15

114 103と同じ

115 94と ibid., P. 208

116 Frederick Bracher : *Steinbeck and the Biological View of Man* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 186)

117 94と ibid., p. 198

118 94と ibid., p. 207

119 Donald Heiney : *Recent American Literature*, p. 237

120 117と同じ

121 ナヴァール女王 (Le Reine de Navarre) の作 (1559)。デカメロンにならつてフランスのデカメロンを書こうとしたが完成しなかつた。

122 Peter Lisca : *The Wayward Bus —— A Modern Pilgrimage* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 290)

123 ibid., p. 281

124 Antonia Seixas : *John Steinbeck and the Non-teleological Bus* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 277)

125 ibid., p. 279

126 125と同じ

127 122と ibid., p. 282 (Pascal Covici にあてた Steinbeck の手紙から)

128 オランダに始まつた教訓劇の名で15世紀イギリスで一般的に行われたもの。登場人物は神，特使，死，エヴリマン，交友，血縁，善行，幸福，知識，美，力，その他。テーマは死がエヴリマンを召喚すること。エヴリマンは善行以外の友人はだれも自分について来ないことを知る (Harvey : *The Oxford Companion to English Literature*, P. 274)

129 122と ibid., p. 281

130 *Chicago Sun Book Week*, Feb., 16, 1947

131 Freeman Champney : *John Steinbeck, Californian* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, pp. 145—146

132 *San Francisco Chronicle*, Fed., 16, 1947の書評

133 103と ibid., p. 40

134 Lewis Garnett : *John Steinbeck's Way of Writing* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 36)

135 Alex Comfort : *The Novel and Our Time*, p. 59

136 John Steinbeck : *The Pearl and Burning Bright*, p. 67 (Pan-Books)

137 ibid., p. 85

138 ibid., 表紙

139 スペインの抒情詩人，劇作家 (1899—1936)

140 94と ibid., p. 253

141 John Steinbeck : *Critics, Critics, Burning Bright* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p. 44)